

日本事情の知識：地理、人口、自然編

大川英明

要旨

本稿では大学レベルの日本事情に関する授業内容の現状を考え、日本語教員の役割を考えるとともに日本語教員が日本事情に関する知識を獲得すべき理由について考察する。さらに細川（1994）における日本事情の基本的な内容と日本語レベルについての提案を軸に、日本及び日本人の文化・社会のありかたを考える際に知っておくべき基本的情報の洗い出しを試みる。また、日本事情に関する分析的な理解の必要性を主張する。本稿の後半では日本語教師にとって参考になるような具体的な基本情報の内容目録を地理、人口、自然に絞って提案する。その内容に関しては、深さを追求するというやり方もあるが、あくまでも日本語教員のための知識なので、浅くてもなるべく広くまとめることを念頭に提案している。

【キーワード】日本事情、日本の文化、日本社会、文化理解、日本の地理・人口・自然

1. はじめに

日本の大学では留学生のための教育の一環として日本事情の授業が提供されて久しい。本稿では特に大学レベルの日本事情に関連する問題を扱うことにする。日本事情の基本的な問題について考察したあと、具体的な教授項目のうち、日本の地理、人口、自然に関して日本語教師が授業での説明事項として意識化しておくといけないかと思われる情報を提案する。

2. 日本事情の現状

日本事情の授業に関して誰が何を教えるかについてはある程度の共通理解はあると思われるが、実際の授業の内容を見ると様々な学習項目が設定されている。それ

は細川（1994, p. 141）で説明されている経緯が影響しているからである。

「日本事情」の授業内容については、現在のところ一九六二年に公布された文部省令第二号「外国人留学生の一般教育等履修の特例について」の「日本事情に関する科目としては、一般日本事情、日本の歴史および文化、日本の政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といったものが考えられる」という記述を唯一の拠り所として実施されているにすぎません。・・・「日本事情」の場合は、その教えるべき事柄・内容・範囲等がさだかでないため、何をどう教えたらいいのかわからないわけです。それはすなわち、この科目が基本的な内容の検討なしに、留学生教育のためだけにつくられた急ごしらえの科目だからだといえましょう。

インターネットで公開されている大学レベルの日本事情の授業用シラバスを見ても、日本の文化や社会の特徴以外にも様々な内容が認められる。

(1) 大学で開講されている「日本事情」の内容

- a. 日本語能力に関する内容（作文力、理解力、表現・語彙力を深める）
- b. コミュニケーション能力の養成に関する内容（日本人とのコミュニケーションの方法；異文化コミュニケーション）
- c. 国語学
- d. 言語学
- e. 日本史
- f. 習慣、年中行事
- g. 地域論（特定の都道府県や地方の歴史や文化）
- h. 日本の経済、日本の財政、地方財政制度、日本の社会保障制度
- i. 産業や科学技術の歴史と現在の日本の産業界について
- j. 日本の科学技術、環境対策

誰が何をどう教えるかについては学生の専攻や授業の趣旨によって異なるので一概にこうでなければいけないというように決め付けて言うことは難しい。「誰が」については日本語教師と日本語以外のそれぞれの専門の教師が考えられるが、少なくとも日本語の教師の関与は不可欠である。つまり、日本語教師が直接教えないにしても、留学生の日本語能力によるクラス分けや授業を担当する教師への日本語に関する情

報伝達やアドバイスは必要で、それがなければ、授業担当教師が使う日本語と留学生の日本語運用能力との差が原因で効果的な授業が成立しないこともありえる。更に、複数の教師が日本事情の授業を担当する場合も少なくないが、その場合には、教師間の協調や連携が必要になることは言うまでもない。

日本事情の授業で「何を」取り扱うかという問題も学生や大学の状況による。学生の予備知識がどれくらいあるのか、またクラスの全員が同じ専攻なのか否か、更に授業を通してどのような知識や思考力を獲得して欲しいと思うかにもよる。おそらく最も一般的な日本事情は日本の文化や社会について比較的広く扱うのではないと思われるが、状況によっては当然ある程度深く考察することもありえる。その場合は日本語教育に関係のない話題であれば、日本語教師が担当することはより困難になるので、専門の教師の参加に頼らざるを得なくなる。

3. 日本事情に関する知識の必要性

日本事情の授業で「何をどのように」教えるかに関して細川（1994, pp. 145-146）は次のような学習レベルを提案している。つまり、日本事情の内容は学習者の日本語能力段階に合わせて設定できるというモデルである。

(2) 細川（1994）における日本事情の内容と日本語レベル

- a. 日本及び日本人の日常生活の紹介の授業
- b. 文化・社会を中心とした日本及び日本人に関する情報・知識の伝達の授業
- c. 日本及び日本人の文化・社会のありかたを考える授業

細川（1994）は最初のレベル、(2a) は日本語が初級の後半から中級にかけてのクラスで扱うことが可能であり、生活語彙の導入・確認の際に「日本事情」としてではなく、「日本語」の授業で行うことができると主張している。次のレベル、(2b) は中級から上級にかけてのクラスで扱うことが可能で、一般的な日本語学習の中に組み込んで行うことができるとしている。そして最後のレベル、(2c) は日本事情に関してある程度の知識を持ち、日常レベルでは日本語運用に支障がない学習者のためのレベルである。

学習者がこの順番に日本語学習とともに日本事情の知識や情報を着実に積み重ねて行くのが理想であろうが、1年以内の短期留学で欧米から日本に来る学生を観察す

ると、日本語レベルが上級前期あたりであっても、日本事情に関する知識にはかなりのばらつきがあり、さらに日本事情に関して、特に (2a) や (2b) に関して思ったよりも知識が少ないこともよくある。その原因は学習者の専門が日本語やアジア研究とは遠い専門であるが故に日本文化や日本事情の授業を履修したことがなかったり、また日本語の授業時間が短い故に授業であまり日本事情が扱われなかったり、様々である。

特に海外の大学で日本語を教える場合には授業時間の制約があったり、学生が日本で生活していないということで日本事情に関する幅広い知識の習得に対する動機付けが弱かったり、なかなか日本語の授業の中で日本事情に関する情報をカバーすることが難しいことがある。日本語の教師が日本語の授業以外に日本の文化・社会や日本事情の授業を受け持ったことがある場合には、教師はその知識を獲得することができ、その知識を日本語の授業に生かす可能性が高くなるが、日本事情が教えられるだけのまとまった知識がない場合には、断片的な紹介はできても十分に日本語の授業に組み込むことができないという理由で、学習者が日本事情に関してあまり知識を獲得しないまま日本に留学に来る場合もある。このような理由からも日本語教師が日本事情に関する知識を深めることが望まれる。

また、海外で日本語を教える場合には、日本語の授業以外にも日本事情や日本の文化や社会に関する授業の担当を頼まれたり、授業という形ではなくても、学内でこの分野に関するスピーチを頼まれる可能性は低くない。筆者がアメリカのリベラル・アーツの大学で教えていた時も日本語の授業以外に日本の文化と社会の授業を持たされたこともあったし、学内のシンポジウムにパネラーとして参加させられたこともあったし、スピーチをさせられたこともあった。筆者の専門は言語学と日本語教育だったので、最初はまとまった知識を得るために苦労したが、その後は日本語の授業のためには意味のある経験であったことを納得した。

外国語教育の目標の一つは文化理解に基づいた言語コミュニケーション能力の養成であることは多くの教師が認めることであると思われるが、これが正しければ、日本語教師もある程度日本文化に対する知識の分析的理解が必要となるであろう。日本の文化や社会は欧米のそれとは対照的な側面が数多くあるので、特にアジア以外の学習者にはそれを明示的に指摘しながら説明する必要度が高くなる。

細川 (1994) が提案した (2a) と (2b) の内容がある程度日本語の授業内でカバーできたとしても、(2c) のレベルの内容についてはさらに深い知識が教師には必要に

なってくる。このレベルは当然 (2a) と (2b) のレベルを前提としている。(2c) のレベル、つまり日本語が上級またはそれに近いレベルになると、学習者が日本人や日本の文化についてまとまった意見を述べたり、書いたりする能力が求められる。日本語教師は学習者の日本語を評価することや間違いを直すことは可能であるが、内容に関するコメントや学習者の解釈に関する間違い訂正をしようとすると、教師の知識に依存するところが大きくなる。教師の知識が深ければ深いほど、充実した指導が可能になる。逆に知識が十分でない場合には、内容に関して議論を導いたり、軌道修正したり、情報提供することに関して制約が大きくなる。

以上、日本語教師が日本事情に関する知識を持つておくべき理由を展開してきたが、それをまとめておくことにする。

(3) 日本語教師が日本事情の知識を持つことが望まれる理由

- a. 分析的な知識を持っていれば、初・中級の日本語を教える時に日本事情に関する情報を取り込みやすくなる。
- b. 海外で日本語を教える場合、日本事情、日本の文化や社会に関する情報を授業、スピーチ、シンポジウムなどで提供することを求められることがある。
- c. 文化理解に基づいた言語コミュニケーション能力の養成を目指すならば、日本語教師にも一定の分析的理解が必要になる。
- d. 細川 (1994) が言う日本語上級レベルのための「日本及び日本人の文化・社会のありかたを考える授業」を効果的に実施するためにはより深い日本事情の知識が必要になる。

ほとんどの日本語教師は日本の文化の中で育っているため、生活者としての文化的知識は備えているとしても、それ以上の知識となると意識的に学ぶ必要があるし、より総合的な理解のためにはそれなりの努力が必要になるだろう。日本で育ったからといって何をどのように提示するかについては誰もが心得ているというわけではないし、扱うのが難しい内容やレベルがある。その意味で日本事情に関する意識的な勉強が必要となってくる。

4. 日本事情の内容目録

日本語のクラスを履修していても専攻が日本語・日本学とは関係のない学習者が日

本関連の科目を全く取っていない場合もあるので、特に海外の大学においては日本事情に関する情報を日本語の授業で提供していくことが必要になる。しかしながら、日本語の教科書で日本人の日常生活や日本の文化や社会に関する情報が十分に組み込まれているとは言いがたい。そうすると、日本語教師が授業の中で紹介したり、教科書以外に準備した補助教材を通してカバーすることになる。その時に教師が何を紹介すればいいかについて知っていれば、バランスよく様々な日本事情に関する情報を学習者に提供することが可能になる。ここでまず求められる知識は「狭く深い」知識ではなく、「特に深くはなくてもいいから広い」知識である。しかしながら、このような知識のリストを作ることは原理的に難しい。というのはカバーすべき知識の上限と下限の設定に対する共通認識が得にくいからである。そうであるからこそ、様々な試みがなされるべきであるし、その中でより多くの支持を集めるいくつかの提案に収斂していくべきである。

以下、本稿では日本事情に関して具体的な情報をいくつか提案したい。日本事情と言っても範囲が広く、本稿だけで多くの話題を扱うことは不可能であるので、特に日本の地理、人口、自然に絞り、論を進めていきたい。

5. 地理

5.1 位置

最初に日本の地理に関する基本的な情報を扱う。まず、日本の位置についての情報であるが、海外で教えていると日本に興味がない一般の人々は日本の位置を正確に認識していない場合が少なくないということを感じるが、大学で日本語を履修している学生の場合はまだ状況はいいように思える。しかし、国の位置というものは国際政治、貿易、軍事、文化、等の面で大きな意味を持つので、単純に位置に関する知識だけでなく、位置の持つ意味を確認しておきたい。位置に関しては次のような基本的な情報が考えられる。リストの最後に日本語が中級から上級にまたがる位の学習者のための学習語彙例も挙げておく。

(4) 位置⁽¹⁾

- a. 北東アジアにある。
- b. 太平洋の北西部にある。
- c. 北緯 20° 25'～北緯 45° 33'

- d. 東京、大阪は北緯 35° 付近
- e. 語彙：北東、北西（ついでに、南東、南西）

緯度に関しては具体的な数字を教える必要はないと思うが、この国土の広がりを見ると日本には亜寒帯性から亜熱帯性気候までであることに納得できる。中国、韓国、台湾に近いことはよく知られているが、距離的にはロシアとも近いことはあまり意識的に捉えられていない傾向がある。東アジア諸国と比べると特に極東ロシアとは人的交流が少ないので、認知度は相対的に低くなっている。

5.2 面積と形状

日本の面積は約 37 万平方キロメートルである。日本は小さい国だということを聞くことがあるが、必ずしも小さいと言えるかどうかはわからない。日本の面積はロシア、中国、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどと比較すれば確かに小さいが、日本の面積は世界約 200 か国の中では 60 位である。これを上位と見るか下位と見るかは分かれるところではあるが、日本よりも小さい国が約 140 か国あるということは認識しておく必要があるだろう。

(5) 面積と形状

- a. 日本の面積は約 37 万平方キロメートルである。
- b. 日本の面積は世界 60 位である。
- c. 国土は北東から南西に伸びる。
- d. 細長い形状
- e. 北東端から南西端まで約 3,000 キロメートルある。
- f. 太平洋岸から日本海岸までの最短距離が大きいところでも 2～300 キロメートルくらいである。
- g. 表現：面積、平方キロメートル、～倍、～分の～⁽²⁾（日本の面積は～国の～倍ある。また、～国の～分の 1 である）、南西、伸びる、日本列島

日本は北東から南西に約 3,000 キロメートルも伸びる国なので、これが気候差に現れているし、桜前線⁽³⁾や紅葉前線の北上や南下にかかる時間にも現れている。

5.3 地勢

日本は氷河期においては大陸と繋がっていたが、その後は島となり、陸で外国と国境を接してはいない。しかし、大陸とはそれほど離れていない。対馬から釜山まで約 50 キロメートルである。また、北海道からサハリン島までの距離も約 50 キロメートルである。青函トンネルが 53.9 キロメートルあるので、海底トンネルを敷設できない距離ではない。

(6) 地勢

- a. 日本は島国で、四方が海に囲まれている。
- b. 四つの大きい島の中央には山脈がある。
- c. 1,500~3,000m級の山々がある。(富士山は 3,776mある。)
- d. 国土の約 70%が山地
- e. 国土の約 30%が平野 (関東平野、大阪平野など)
- f. あまり高くない山は木で覆われている。
- g. 川は短く、比較的急なので、流れが速い。
- h. 日本付近で四つのプレート⁽⁴⁾が交わっている。
- i. 語彙：島国、山脈、平野、山地、国土、(川が)急、プレート、覆う(木で覆われる)

日本は環太平洋造山帯に入っており、複数のプレートが存在する。特に太平洋プレートが大陸プレートに沈み込んでおり、その衝突により地震が発生しやすくなっているし、火山活動を誘発しやすい状況を作っている。これはどうして日本では地震、火山、温泉が多いのかという質問の答えに関係してくる。また、(6d) と (6e) で挙げた平野と山地の割合は都市部での建物の混み具合や都市部における人口密度の高さに関係する。

6. 気候

日本の国土の大部分が温帯性気候の範囲にあり、四季がはっきり分かれている。これは主に日本の位置や緯度による。

(7) 気候

- a. 北は亜寒帯から南は亜熱帯までの気候があるが、日本の大部分は温帯にある。
- b. 気候はおおむね温暖⁽⁵⁾
- c. 降水量は比較的多い。⁽⁶⁾
- d. 四季がはっきりしている。
 - i) 春: 関東や関西では3月の下旬から4月の最初頃に桜が咲く。五月晴れ。
 - ii) 夏: 夏は高温多湿で、蒸し暑い。
 - iii) 秋: 秋は台風シーズン。秋晴れ。晩秋は紅葉シーズン。
 - iv) 冬: 冬型の天気は西高東低の気圧配置（太平洋側の地方は乾燥し、晴天の日が続く。日本海側の地方は雪の日が続く。これは山脈が壁となって北からの雪雲を遮る効果を持つため。）
- e. 6月から7月中旬頃に梅雨があり、雨がよく降る。
- f. 8月と9月によく台風が来る。（気圧はヘクトパスカル（hPa）で表され、台風の規模を表す時によく用いられる。）
- g. 語彙: 気候、温帯、(亜)寒帯、(亜)熱帯、四季、五月晴れ、秋晴れ、湿度、真夏日、熱帯夜、梅雨、西高東低、気圧、ヘクトパスカル（hPa）

日本の豊かな自然と季節の変化が自然崇拜、宗教（神道）、俳句、小説における自然描写の多さと豊かさに繋がっているし、手紙における時候の挨拶や俳句等、日本の文化に大きな影響を与えている。

7. 自然災害

日本は地震や台風に見舞われることは比較的知られているが、その他にも様々な自然災害が起こる。また、日本には自然災害に関連する様々な情報が数多くあるが、基本的なところだけをまとめてみる。

(8) 自然災害

- a. 日本には火山が多く（浅間山、磐梯山、桜島、雲仙岳、阿蘇山、等 40 の活火山）、噴火する火山もある（阿蘇山、雲仙岳、桜島、等）。
- b. 日本は地震が多い。
- c. 地震の規模はマグニチュードとともに震度によっても示される。(10段階:0、

1、2、3、4、5弱、5強、6弱、6強、7)

- d. 地震が起こる直前に緊急地震速報が出されるようになった。
- e. 地震のあとは津波が起こることがある。
- f. 夏から秋にかけてよく台風が来る。(接近数は8月と9月が最多；台風は番号で呼ぶ。)
- g. 暴風や大雨などの異常気象の時には警報や注意報が出される。
- h. 梅雨を中心に集中豪雨が起きることもある。
- i. 川が比較的短く、急なので、洪水が起こることもある。
- j. 集中豪雨などにより土砂崩れが起こることもある。
- k. 地震などのために学校や地域のセンターが避難所として指定されている。
- l. 雪国の山岳地帯では雪崩が起こることもある。
- m. 表現：火山、噴火、温泉、地震、震度、マグニチュード、緊急地震速報、津波、台風～号、暴風、警報、注意報、集中豪雨、洪水、土砂崩れ、雪崩、(地震に対する)備え、避難所

火山の存在と地震とそれに伴う津波の発生は前節で扱った環太平洋造山帯内における位置と活発なプレート活動による。日本に来る台風はフィリピンの東の海で発生する場合が多い。日本への襲来とその時期は日本の緯度や経度、つまり位置が要因となっている。

8. 人口

日本の人口は現在、約1億2千7百万人である。一般的に言えることであるが、データなどの数字はその解釈や意味を考えて初めて生きている。日本の人口であれば、これは世界約200国の中で10位の大きさで、日本の面積(60位)の順位よりも更に上位となっている。日本は国内総生産では世界第2位の経済大国であり、ロシアを除くどのヨーロッパ諸国よりも大きな人口を持つ国ではあるが、それに対してどうして世界的に大きな影響力を持つ政治的なリーダーが少ないのか、どうして日本は国際的な政治力がさほどないのかというような問題を考えるためのきっかけにもなる。

(9) 人口

- a. 日本の人口は約1億2千7百万人で、これは世界10位の規模である。(2008

年)

- b. 人口は平野に集中している。人口の 40%以上が東京、大阪、名古屋の 3 大都市圏に住んでいる。
- c. 首都であり一番大きい都市である東京の人口は約 1200 万人。
- d. 日本の人口密度は高く、1 平方キロメートルあたり 343 人 (2005 年) で、これは世界第 5 位である。
- e. 2006 年頃から人口が減少し始めた。
- f. 出生率は現在約 1.3 である。高齢化率 (65 歳以上の人口の率) は 22% (2008 年) で、少子高齢化が進行している。
- g. 語彙: 人口、人口密度、(数字) あたり、少子高齢化

日本の人口密度は世界第 5 位と上位になっているが、平野での人口集中に目を向けると、更に高密度であることがわかる。日本の人口密度は 1 平方キロメートルあたり 343 人で (2005 年) であるが、国土の 30%しかない平野に人口が集中している。都道府県では東京都が 1 位で、その人口密度は 1 平方キロメートルあたり 5,541 人 (2005 年)、2 位の大阪府は 4,562 人と非常に高い。市町村レベルでは更に人口密度は高くなる。埼玉県 ^{わらび} 蕨市の人口密度は日本一高く、1 平方キロメートルあたり 13,933 人、2 位は東京都武蔵野市で、12,651 人、3 位は大阪府守口市で 11,963 人である (2001 年)。このような状況は住宅の敷地が狭いことや住宅の値段が高いことと関係があるように思われる。

9. 動植物

日本人は「花鳥風月」という言葉からもわかるように、長い間自然に対し並々ならぬ愛着を持っていた。それは動植物一般についても例外ではない。そして、それは様々な文化となって発現している。

9.1 動物・魚・虫

日本では大型の肉食獣や魚食性淡水魚等、食物連鎖で上位に位置する捕食動物が少ないということはあるが、日本の動物相は豊富である。面積の割には動物の種類は多い。一つの理由は国土が南北の広がり大きいからである。また、四方が海に囲まれていることや動物を食べないという宗教上の制約があったことなどで魚介類はよく

食べていた。そして、それが魚介類をめぐる豊かな文化につながった。

(10) 動物

- a. 豊富な動物相⁽⁷⁾
- b. 豊富な魚介類：日本人は様々な魚介類を食べてきている。それに伴い、その名称や漢字が多く存在する。
- c. 日本は明治時代以前、鶏肉は食べていたが、豚や牛を食べる習慣はなかった。しかし、魚は身近な蛋白源であった。
- d. 蛋白源として虫を食べる文化もあった。(イナゴ、ハチの子、カイコのさなぎ、ざざむし(甘露煮))
- e. 労役には牛や馬が使われた。(牛車)
- f. 動物に関する信仰や考え方は日本固有の伝承以外に仏典、中国の古典文学などに由来するものが多い。
- g. 動物は昔話にもよく出てくるし(タヌキ、キツネ、ツル等)、絵画で描かれている。
- h. 日本語はオノマトペが発達した言語であるが、動物や鳥、虫の鳴き声の擬音語も多く存在する。
- i. 鳥や虫の鳴き声を楽しむという音の文化・美意識がある。
- j. 虫のことわざ・慣用句も多く存在する。⁽⁸⁾
- k. 語彙
 - i) 動物：タヌキ、キツネ、シカ、クマ、サル、ツル、カメ、ウサギ、カエル、カメ
 - ii) 鳥：ツル、ツバメ、スズメ、カラス、ハト、カモメ、ニワトリ、ウグイス、ツル、カモ、キジ、ヒバリ、ウミネコ
 - iii) 魚貝類：タイ、マグロ、サケ、サンマ、カツオ、サバ、タラ、フグ、ハマチ、クジラ、サメ、イルカ、オットセイ、アシカ、ウナギ、アナゴ、タコ、イカ、貝、ハマグリ、シジミ、サザエ、クラゲ、イクラ、たらこ、アユ、コイ、キンギョ
 - iv) 虫：コオロギ、スズムシ、マツムシ、キリギリス、バッタ、アリ、カブトムシ、クワガタ、トンボ、セミ、ホタル、テントウムシ、ハチ、チョウ(チョウチョ(ウ))、ガ、カ、ハエ、ゴキブリ

和歌や俳句、文学作品で季節感を表すために鳥や動物や虫が使われることもよくあった。これも日本人の自然に対する興味を表す例であると思われる。

9.2 植物

複数の気候帯にまたがる国土にはそれぞれの気候帯の植生が認められる。亜熱帯から亜寒帯の植物が生育している。日本は植生豊かな国であり、日本人は古代から植物を含む自然に強い興味を持ってきた。それは宗教、文学、食文化、工芸品、等、広く日本の文化に認められる。植物は日本人の生活の中では欠くことのできない要素になっている。なお、ここでは野菜や果物は扱わない。

(11) 植物

- a. 亜熱帯から亜寒帯の草木がある。また、森林は常緑広葉樹林（カシ等）、落葉広葉樹林（ブナ等）、常緑針葉樹林（トドマツ・シラベ等）がある。
- b. 昔は多くの植物を生活用具に使っていた。（経木⁽⁹⁾、竹皮、わらづと⁽¹⁰⁾、曲げわっぱ⁽¹¹⁾、畳、箒、熊手、等）
- c. 日本人は昔から植物に対する興味が強く、様々な文化にそれが表れている。
- d. 日本の文学、文芸にも植物の記述がしばしば見られる。（和歌、俳句、小説⁽¹²⁾）
- e. 日本には盆栽、盆景や生け花等、植物に関係する文化がある。
- f. 陶芸、漆器、布、等の工芸品の絵柄として植物が選ばれることも多い。
- g. 花見や紅葉狩りや宗教など植物は民俗学的な関わりもある。⁽¹³⁾
- h. 植物の名前が入ったことわざや慣用句が少なからずある。⁽¹⁴⁾
- i. 家紋の多くが植物に関係がある。⁽¹⁵⁾
- j. 語彙：植物、盆栽、生け花（華道）、朝顔、菊、松、竹、梅、竹、笹、桃、栗、柿、杉、イチョウ、桜、花見、紅葉狩り

等級を表すのに植物の名前が使われることがある。「松」「竹」「梅」がその例で、食堂のメニューやサービス、部屋の名前等に使われ、そのレベルやランクを表すために使われる。

日本人が持つ草木や自然に対する強い親近感と興味は上のリストでもわかる。日本人は屋外に存在する自然を屋内でも楽しもうという気持ちも強く、自然を家の中でも楽しむ文化を作り出した。その例が、盆栽や盆景や生け花であろう。また、家屋の構

造を見ても、自然への接近が見て取れる。日本の家は欧米とは異なり、窓が大きく開き、庭へ出やすい構造になっている。部屋と庭の間には縁側や濡れ縁があり、内から外、つまり、人工物から自然へのアプローチが広がっている。

10. まとめ

以上、日本及び日本人の文化・社会のありかたを考える時に前提となるような基本的な情報についてまとめ、提案した。先にも述べたように、情報を深く、詳細に記述して目録を作るというアプローチもあるが、日本語教師の専門ではない内容も多いので簡便性を重視し、あまり深くならないよう試みた。学習者が日本の文化や社会に関する知識があまりない状態で日本文化や社会のありかたを議論しても知識不足ゆえに不毛な議論に終わる危険性もある。日本語の授業でできるだけ日本の文化や社会に関する基礎的な情報をカバーすることができればいいが、授業時間等の制約でそれが困難である場合でも、抜えるだけの知識と抜おうという意識は日本語教師として備えていたいものである。

注

- (1) 東京から飛行機でソウルまで約 2 時間 45 分、北京まで：約 4 時間 10 分、台北まで：約 4 時間、サンフランシスコまで：約 9 時間。フェリーで福岡から釜山^{ポサン}まで約 3 時間。
- (2) 日本の面積は韓国の約 4 倍、台湾の約 10 倍、フィリピンの約 1.2 倍である。また、中国やアメリカの 25 分の 1、インドの 9 分の 1、ロシアの 45 分の 1、インドネシアの 5 分の 1 である。
- (3) 九州南部や四国南部の桜の開花日は例年 3 月 25 日ごろで、一番遅いのは北海道北部や東部で 5 月中旬から下旬にかけてである。なお桜前線の基準となるソメイヨシノが咲かない沖縄は桜前線の発表では除外されている。沖縄の主な桜は寒緋桜で、これは 1 月下旬ごろ咲く。
- (4) 日本の地震には、ユーラシアプレート、北アメリカプレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートの 4 つのプレートが関係している。
- (5) 東京の平均最高気温は 8 月が最も高く、30.8℃。また平均最低気温は 1 月も最も低く、2.1℃。
- (6) 日本の平均年間降水量は約 1700 ミリで、これは世界平均降水量(約 970mm)の約 2 倍である。しかしながら、一人当たりの降水量は約 5000 m³でこれは世界平均(22,000 m³)の約 1/4 である。年間降雨日数は 116 日である。
- (7) 日本には世界で最も北に生息する猿（青森県）や自然の温泉で暖をとる猿や海水でサツマイモなどの食べ物を洗って食べる猿もいる。

- (8) 虫の息（瀕死）、虫の知らせ（予感）、虫が（の）いい（自分勝手）、虫の居所が悪い（機嫌が悪い）、虫が好かない（気に入らない）、飛んで火にいる夏の虫（自ら危険に飛び込む）、一寸の虫にも五分の魂（小さな虫でも宿る魂は人のそれと変わらない）、等
- (9) 「経木」とはスギやヒノキなどの木を薄く切ったもので、おにぎりや生鮮食品などの包装に使われたり、トレイとして用いられる。
- (10) 「わらづと」とは藁を編んで納豆などの食品を包むようなもの。
- (11) 「曲げわっぱ」とはスギやヒノキなどの木を薄く切り、煮沸工程を経て、円筒状にしたもので、弁当箱や米びつなどとして使う。秋田県大館市の伝統工芸品。
- (12) 源氏物語には 101 種類もの植物についての記述がある。（『バイリンガル日本事典』、p. 35）木や植物を直喩として用いるのは日本文学の特徴の一つであると考えられる。（『バイリンガル日本事典』、p. 35）
- (13) 古代の人々は山、川、植物等の自然に恐れを感じるとともに自然に神を認め、祈り、救いを求めていた。そして、宗教的な祭事のために松や榊などの常緑樹を使い、動物の代わりに海草や魚介類等の海産物や野菜を供えた。このような伝統は今でも神道に認められる。殺生を禁じていた仏教でも同じように花や木が使われている。
- (14) 果物：蜜柑が黄色になると医者が青くなる；桃栗三年柿八年
 野菜：青菜に塩；秋茄子は嫁に食わずな
 樹木：松の事は松に習え、竹の事は竹に習え；木に竹を接ぐ
 花：花より団子；いずれ菖蒲か杜若
 その他：蒔かぬ種は生えぬ；蓼食う虫も好き好き
- (15) 有名な例をあげると、天皇の紋は菊花御紋章であり、徳川家康の家紋は葵紋（三葉葵紋）である。

参考文献

- 講談社インターナショナル（2003）『バイリンガル日本事典』講談社インターナショナル
- 水谷修、その他編（1995）『日本事情ハンドブック』大修館書店
- 細川英雄（1994）『日本語教師のための実践「日本事情」入門』大修館書店